

松岡 葵 (九州大学大学院)

要旨：本発表は、尾前方言における形容詞経験者構文の格標示を、言語類型論的観点から分析する。本発表が主な考察対象とするのは、経験者項と刺激項の二項を要求し、心的側面を表す心情述語をとる経験者構文である。まず、尾前方言における形容詞経験者構文が、他動詞文とも二重主語文とも類似することを指摘し、形容詞経験者構文の経験者項-刺激項が、典型的な他動詞文と同様である【主格-対格】の格フレームと、典型的な他動詞文から逸脱した【主格-主格】、【主格-与格】の格フレームをとることを示す。次に、系統の異なる 10 言語における経験者構文がとる格フレームを分類し、尾前方言における形容詞経験者構文の格フレームが類型論的にどのように分類されるかを議論する。

1. はじめに

本発表は、宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞経験者構文（以下の(1), (2)に例示）について、その格標示に着目し、言語類型論的観点から分析を行うことを目的とする。

- (1) *oraa* *in={no/ni/*oba}* *ozyee.*
 1.SG.TOP 犬={NOM/DAT/ACC} 怖い.NPST
 経験者 刺激
 「私は犬が怖い。」（発表者フィールドデータ¹）
- (2) *oraa* *ware={ga/oba/*ni}* *nikii.*
 1.SG.TOP 2.SG={NOM/ACC/DAT} 憎い.NPST
 経験者 刺激
 「私はあなたが憎い。」

上で示したように、経験者構文は経験者項と刺激項の二項を要求し、心的側面を表す心情述語や五感に関する感覚述語をとる構文である。のちに詳しく見るように、尾前方言の形容詞経験者構文のデフォルトの格フレームは、標準日本語や他の多くの方言と同様、【主格-主格】（経験者・刺激いずれも主格）であるが、述語によっては刺激項が与格や対格をとりうる点が特徴的である。とりわけ、与格をとるのは九州方言、四国方言、中国方言などの西日本方言の一部に偏って見られる特徴である（下地他 2018）。

本発表では、まず尾前方言の形容詞経験者構文を概観し、格フレームの記述を示す。次に、尾前方言の形容詞経験者構文を通言語的な観点から考察する。特に、経験者構文の非典型格標示（Næss 2007, Haspelmath 2001 など）の観点から類型的にどう位置付けられるかを議論する²。

¹ 以下、尾前方言のデータはすべて発表者のフィールドデータである。

² 尾前方言は対格型言語である。主語にも目的語にも Differential Argument Marking が生じる。主格助詞には *=ga* と *=no* があり、有生性が高い場合や他動性が高い場合、焦点化されている場合は *=ga* を、そうでない場合は *=no* をとりやすくなる（下地 2016: 35）。対格助詞には *=ba*, *=oba*, *=o* があり、主語に比べて目的語の有生性が高い場合や、目的語が述語と離れた場合に有形の格標示をうけやすい（下地 2016: 45）。

2. 二項述語形容詞文の分類

本発表が扱う言語現象は、二項述語形容詞文に関するものである。なお、以下では便宜的に、形容詞と形容動詞を区別せず形容詞と呼ぶが、本発表の結論には影響しない。

本発表では、二項述語形容詞文に下位分類を設ける。二重主語文 ((3a)に例示) と形容詞経験者構文 ((3b), (1), (2)に例示) である。これらは、形容詞述語文である点、形式的に二項をとる点で類似する。

(3a) { <i>oraa/ore=ga</i> }	<i>se=ga takyaa.</i>	(3b) { <i>oraa/*ore=ga</i> }	<i>ware=ga ozyee.</i>
{1.SG.TOP/1.SG=GEN} 背=NOM 高い.NPST		{1.SG.TOP/1.SG=GEN} 2SG=NOM 怖い.NPST	
主体	関連物	経験者	刺激
「私は背が高い。 / 私の背が高い。」		「私はお前が怖い。 / *私のお前が怖い。」	

しかし、二重主語文と形容詞経験者構文には相違点も存在する。(3a)に示すように、二重主語文は、第一項と第二項が広義の所有関係 (全体と部分, 所有と被所有, 主体と関連物) にある構文である。二重主語文は、形式的には二項文でありながら、意味的には一項文的である。すなわち、述語形容詞が要求する必須項は描写対象の第二項だけであって、第一項は (述語ではなく) 第二項が要求する所属先のようなものである。例えば(3a)において、「背」という名詞は、それが誰かの背であることを含意する。実際、(3a)の第一項と第二項を属格=*ga* で結び、ひとつの名詞句に転換することができる。

一方、(3b)や(1)(2)で示した形容詞経験者構文においては、述語が独立した二項を要求し、第一項が経験者、第二項が刺激の意味役割をもつ。経験者は刺激を感知する主体であり、刺激は経験者の知覚を引き起こす原因となる。述語が独立した二項を要求するという点において、形容詞経験者構文は、二重主語文よりも、(4)に示す他動詞文と類似した特徴をもつ。さらに、形容詞経験者構文と他動詞文には、(5)に示す類似点も存在する。

(4)	<i>taroo=ga ziroo=no koto=oba nagut-ta.</i>
太郎=NOM	次郎=GEN FMN=ACC 殴る-PST
「太郎が次郎を殴った。」	

(5) 形容詞経験者構文の刺激項と他動詞文の目的語との類似点

- 他動詞文の目的語と同様に、対格標示されることがある ((2)に例示)。
- 「のこ」テスト：標準語の場合と同様 (Kishimoto 2004)，典型的な他動詞文において、特に目的語が人間名詞である場合、「のこ」をつけられる場合がある。形容詞経験者構文の刺激項も、他動詞文の目的語と同様に、「のこ」テストをパスすることがある。

しかし、他動詞文と形容詞経験者構文には、述語が動詞か否かという相違点も存在する。二重主語文、形容詞経験者構文、二重主語文のそれぞれの類似点、相違点を表 1 にまとめる。

表 1. 他動詞文・形容詞経験者構文・二重主語文の類似点と相違点

	他動詞文	形容詞経験者構文	二重主語文
形式的に二項をとる	○	○	○
二項が述語の必須項である	○	○	×
動詞述語文である	○	×	×

3. 尾前方言における二項形容詞述語文の格フレーム

3.1. 二重主語文と形容詞経験者構文の違い

二重主語文は、二項形容詞述語文のデフォルトの格フレームである【主格-主格】のみを許容するが、形容詞経験者構文は【主格-与格】や【主格-対格】も許容する（下地他 2018）。*kitii*「きつい」という同じ形容詞でも、(6)のように形容詞経験者構文の解釈の場合は【主格-与格】を許容するのに対し、(7)のように二重主語文の解釈の場合にはこれを許容しない。

- (6) *oraa kaze={ga/=ni/*=oba} kitii.*
 1.SG.TOP 風邪{=NOM/=DAT/=ACC} きつい.NPST
 「私は風邪がきつい」（＝私は風邪が原因できついと感じる；形容詞経験者構文）
- (7) *oraa kata={ga/*=ni/*=oba} kitii.*
 1.SG.TOP 肩{=NOM/*=DAT/*=ACC} きつい.NPST
 「私は肩がきつい」（≠私は肩が原因できついと感じる；二重主語文）

3.2. 形容詞経験者構文の格フレーム

以下の表 2 にまとめるように、形容詞経験者構文の格フレームは、その述語形容詞の種類によって異なる。心情形容詞においては【主格-主格】をとるもの、【主格-対格】をとるもの、【主格-与格】をとるものが見られるが、感覚形容詞は【主格-主格】をとるもののみである。

表 2. 刺激項の格標示パターンと形容詞の具体例

	格フレーム	具体例
心情形容詞	【主格-主格】	「 <i>sukan</i> (嫌いだ) 」, 「 <i>suki</i> (好きだ) 」, 「 <i>nikii</i> (憎い) 」, 「 <i>uryaamasii</i> (うらやましい) 」
	【主格-対格】	
	【主格-主格】 【主格-与格】	「 <i>ozyee</i> (怖い) 」, 「 <i>mendokusyaa</i> (面倒くさい) 」, 「 <i>kimotiwarii</i> (気持ち悪い) 」, 「 <i>uresii</i> (嬉しい) 」, 「 <i>kurusii</i> (苦しい) 」, 「 <i>kanasii</i> (悲しい) 」, 「 <i>tozennyaa</i> (寂しい) 」 etc.
	【主格-主格】	「 <i>raku</i> (楽だ) 」, 「 <i>uttoosii</i> (鬱陶しい) 」
感覚形容詞	【主格-主格】	「 <i>ityaa</i> (痛い) 」, 「 <i>mabaii</i> (まぶしい) 」, 「 <i>karyaa</i> (からい) 」, 「 <i>urusyaa</i> (うるさい) 」 etc.

このように、形容詞経験者構文の格標示に着目すると、二重主語文と同様に【主格-主格】をとるパターン、通常他動詞文と同じ【主格-対格】の格フレームをとるパターン、通常他動詞文とも二重主語文とも異なり、【主格-与格】をとるパターンの 3 パターンがあることがわかる。

4. 通言語的にみた動詞経験者構文の格標示

以下では、尾前方言の形容詞経験者構文の格標示の問題を類型的に位置づけるために、まず他言語の経験者構文の格標示を分類する。地理的・系統的にできるだけ偏りがないように言語を選出し、経験者構文において非典型格標示が生じるかを調査した。以下では、心情述語をとる経験者構文のみを考察対象とする。なお、以下の言語における経験者構文のデータは、動詞述語文のデータである。

(8) サンプル言語 (10 言語) : **イク語** (ウガンダ, ナイル・サハラ語族, 対格型, Schrock 2017) / **アワジュナ語** (エクアドル, ヒバロ語族, 対格型, Overall 2007) / **ラパヌイ語** (イースター島, オーストロネシア語族, 対格型, Kieviet 2017) / **ツンドラネネツ語** (コミ共和国, ウラル語族, 対格型, Nikolaeva 2014) / **クーク・ターヨレ語** (オーストラリア, パマニュンガン語群, 能格型, Gaby 2006) / **ヤウル語** (オーストラリア, ニュルニュル語族, 能格型, Hosokawa 1991) / **バスク語** (スペイン・フランス, 系統不明, 能格型, Hualde and de Urbina 2003) / **レズギ語** (ダゲスタン, Nakho-Daghestanian 語族, 能格型, Haspelmath 1993) / **マラヤーラム語** (インド, ドラヴィダ語族, 対格型, Asher and Kumari 1997) / **ブナン語** (インド, チベット・ビルマ語族, 能格型, Widmer 2014)

典型的な他動詞文の格標示に対して経験者構文の格標示に着目すると, 理論上, **表 3** のように, 経験者項と刺激項の両項が典型格標示される**タイプ 1**, 経験者項のみが非典型格標示される**タイプ 2**, 刺激項のみが非典型格標示される**タイプ 3**, 両項が非典型格標示される**タイプ 4** の 4 通りが考えられる。これに対し, サンプル言語を分類した結果を**表 4** に示す。

表 3. 非典型格標示に着目した経験者構文における格フレームの可能なパターン

		刺激項の格標示	
		典型	非典型
経験者項の格 標示	典型	タイプ 1	タイプ 3
	非典型	タイプ 2	タイプ 4

表 4. 経験者構文における格フレームタイプとそのタイプをとる言語

タイプ	非典型格標示 (経験者-刺激)	該当タイプの格フレームをもつ言語
タイプ 1	なし	対格型 : イク語 (Schrock 2017: 530), ラパヌイ語 (Kieviet 2017: 418), アワジュナ語 (Overall 2007: 440) 能格型 : バスク語 (Hualde and de Urbina 2003: 404)
タイプ 2	与格 [経験者]	対格型 : マラヤーラム語 (Asher and Kumari 1997: 199) 能格型 : バスク語 (Hualde and de Urbina 2003: 182), レズギ語 (Haspelmath 1993: 280)
タイプ 3	与格 [刺激]	対格型 : ラパヌイ語 (Kieviet 2017: 418) 能格型 : ヤウル語 (Hosokawa 1991: 243)
	奪格 [刺激]	対格型 : イク語 (Schrock 2017: 531)
タイプ 4	与格-主格	対格型 : マラヤーラム語 (Asher and Kumari 1997: 199)
	与格-与格 (奪格)	能格型 : ブナン語 (Widmer 2014: 232)
	所格-与格 / 奪格	対格型 : ツンドラネネツ語 (Nikolaeva 2014: 233)
	絶対格-奪格	能格型 : クーク・ターヨレ語 (Gaby 2006: 191)
	与格-出格	能格型 : レズギ語 (Haspelmath 1993: 281)

本発表では, 上記のデータを基に, 動詞経験者構文に関して以下の 4 点を主張する。

- (9) 表 3 に示したすべてのパターンが、実際に観察される (表 4)。
- (10) 普遍傾向：すべての言語は、経験者項と刺激項を異なる格で標示する。(例外：ブナン語)
- (11) 含意傾向：一項のみが非典型格標示されるなら、その項は与格標示される。(例外：イク語)
- (12) 含意法則：経験者構文で奪格や出格が用いられるならば、それは刺激項を標示する。

ブナン語がもつ格フレームは(10)の例外となる。しかし、ブナン語では刺激項が与格で標示されたあとにさらに奪格で標示される場合があり (Widmer 2014: 232)，両項が同じ格標示をうけることを回避することは可能である。つまり、両項が同じ標示にしかない言語はサンプルには存在しない。

一般的に与格と言われているものが担う意味役割は、受け手や受益者、経験者や着点、目的だとされおり (Næss 2009: 573)，経験者が与格標示されることは通言語的に見てよくあることとして知られている。しかし、ラパヌイ語やヤウル語 ((13)に例示) のように刺激項が与格標示される言語もあることは、経験者構文や与格に関する研究において、これまで注目されていない。

- (13) *ngaju-ni walkawalk-yi nga-ni-dyu-n(-dyina).*
 1-ERG salmon-DAT 1-EN-say-IMPF(-3.DAT)
 'I love salmon(meat).' (ヤウル語) (Hosokawa 1991: 425 (22))

5. 尾前方言における形容詞経験者構文の類型論的考察

5.1. 述語の品詞を考慮しない場合

経験者構文は、4 節で見た 10 言語のように動詞述語の場合と、本発表で扱う尾前方言のように形容詞述語の場合もある。今、この品詞の区別を考慮せず、4 節の動詞述語をベースにした経験者構文の格フレームに関する類型特徴に照らして尾前方言のデータを考察した場合、【主格-主格】の格フレームをとりうる点で、(10)、(11)に対する例外となる。

この類型化は、あくまで典型的な格フレームを他動詞文のそれ (【主格-対格】) におくという前提がある。この観点から見れば、【主格-主格】は非典型格フレームと言える。ところが、尾前方言において、【主格-主格】は明らかに二項述語形容詞文の典型的な格フレームであって、これを非典型格フレームとして分析するのは、尾前方言の形容詞経験者構文の実態に即さない。

5.2. 述語の品詞を考慮した場合

二項述語形容詞文の典型的な格フレームは【主格-主格】であり、形容詞の種類を問わず見られるデフォルトの格フレームである。これに対し、他動詞文の典型的な格フレームは【主格-対格】である。形容詞経験者構文は、すでに 2 節で述べたように他動詞文とも二項述語形容詞文 (二重主語文) と共通点を持っているが、格フレームの選択には動詞述語か形容詞述語かの区別が大きく関わっており、形容詞経験者構文の格フレームは二項述語形容詞文の典型である【主格-主格】をとる。その上で、非典型的なパターンとして他動詞文的な【主格-対格】と、他動詞文と二重主語文のいずれにおいても非典型的なパターンである【主格-与格】をとる、と分析できる。

表 5. 他動詞文・形容詞経験者構文・二重主語文の格フレームの比較

	他動詞文	形容詞経験者構文	二重主語文
形式的に二項をとる	○	○	○
二項が述語の必須項である	○	○	×
動詞述語文である	○	×	×
典型的な格フレーム	【主格-対格】	【主格-主格】	【主格-主格】
非典型的な格フレーム	【主格-与格】	【主格-対格】 【主格-与格】	

表 5 から、形容詞経験者構文が他動詞文と二重主語文の中間的な様相を示すことが、格フレームに影響を与えていると考えることができる。この点で注目すべきは【主格-与格】の格フレームである。

形容詞経験者構文が【主格-与格】の格フレームをとるのには、以下のふたつの可能性がある。第一に、他動詞文の格フレームを用いている可能性がある。【主格-与格】の格フレームは、一部の他動詞文((14)に例示)にもみられる。

- (14) *ya=no* *mato=ni* *atat-ta.*
矢=NOM 的=DAT あたる-PST
「矢が的にあたった。」

刺激項が与格標示される動機について、他動詞文における被動者項は動作主から影響を受ける存在であり、刺激項は経験者項に知覚されるという点で被動者的な側面をもつ。よって、形容詞経験者構文で【主格-与格】フレームが生じるのは、被動者項と刺激項との意味的な類似から、(14)のような他動詞文にみられるにみられる格フレームを用いている可能性がある。

第二の可能性として、刺激項が与格標示されるのは、経験者構文の刺激項に関する意味的な特徴によるという可能性も考えられる。刺激項は、経験者項に知覚されるという点では被動者的であるが、経験者項に知覚を生じさせるという点では動作主的であり、いわば動作主的側面と被動者的側面の二面性を持っている。経験者構文の研究では、経験者の動作主的側面と被動者的側面の二面性が注目されてきているが (Næss 2007 の *affected agent*)、刺激項にも同様の二面性がある点は見過ごされてきた。このような二面性を持った意味役割が共に与格標示されうるという点は重要であり、経験者の与格標示も刺激の与格標示も同じメカニズムで、すなわち動作主と被動者の二面性の側面から説明できる可能性がある。実際、尾前方言のような形容詞経験者構文と、4 節で見た動詞経験者構文の両方で、つまり、述語の品詞にかかわらず、経験者構文において刺激項が与格で標示される現象がみられる。

上記ふたつの可能性のうちいずれが正しいのか、あるいは他の可能性もあるのか、現時点では解明できていない。

6. まとめと今後の課題

本発表では、まず、尾前方言における形容詞経験者構文の格フレームを記述した。次に、尾前方言の当該構文の特徴を、非典型格標示の類型論の観点からどう位置付けられるかを論じた。その結果、経験者構文の格フレームの類型化の際には動詞・形容詞などの述語の区別が必要である点を指摘した。形容詞経験者構文は、他動詞文と二重主語文の中間的な様相を示す。格フレームに関しては、二

重主語文と同様の【主格-主格】を典型とし、他動詞文における典型的な格フレームの【主格-対格】をとり、二重主語文においても他動詞文においても非典型的な【主格-与格】の格フレームもとる。

今後の課題は、刺激項が与格で標示される動機を探ることである。前述したとおり、経験者構文に関する研究においても、与格に関する研究 (Haspelmath 2003 の与格の意味地図, Næss 2009 など) においても、刺激項が与格で標示される現象は注目されていない。経験者構文の側面からは、5 節の終わりで、刺激項が与格標示される現象が、他動詞文の被動者項との類似性による可能性がある一方で、経験者構文の刺激項に関する通言語的な特徴の一つである可能性もあることを示した。これは、言い換えると、刺激項の与格標示は被動者的な側面のみを表しているのか、動作主的な側面と被動者的な側面の二面性を表しているのかという問題であり、未解決のままである。

略号一覧

-: 接辞境界 / =: 接語境界 / 1: 1 人称 / 2: 2 人称 / 3: 3 人称 / ACC: 対格 / DAT: 与格 / EN: 挿入鼻音 / ERG: 能格 / FMN: 形式名詞 / GEN: 属格 / IMPF: 未完了 / NOM: 主格 / NPST: 非過去 / SG: 単数 / TOP: 主題

参考文献

- Asher, R. E. and T. C. Kumari (1997) *Malayalam*. London: Routledge / Gaby, Alice Rose (2006) *A Grammar of Kuuk Thaayorre*. PhD thesis, University of Melbourne. / Haspelmath, Martin (1993) *A grammar of Lezgian*. Berlin: Mouton De Gruyter. / Haspelmath, Martin (2001) Non-canonical marking of core arguments in European languages. In: Alexandra Aikhenvald, R.M.W. Dixon and Masayuki Onishi (eds.) *Non-canonical marking of subjects and objects*, 53-85. Amsterdam: John Benjamin. / Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison. In: Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language Cognitive and Functional Approaches to Language Structure volume2*, 211-242. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. / Hosokawa, Komei (1991) *The Yawuru language of West Kimberley: a meaning-based description*. PhD thesis, The Australian National University. / Hualde, Jose Ignacio and Ortiz Jon de Urbina (2003) *A grammar of Basque*. Berlin: Mouton De Gruyter. / Kieviet, Paulus (2017) *A grammar of Rapa Nui*. Berlin: Language Science Press. / Kishimoto, Hideki (2004) Transitivity of ergative case-marking predicates in Japanese. *Studies in Language* 38 (1): 105-136. / 久保蘭愛 (2018) 「鹿児島県甕島里方言の形容詞の特徴」九州方言研究会第 43 回口頭発表. かがしま県民交流センター, 2018 年 1 月 6 日. / Nikolaeva, Irina (2014) *A grammar of Tundra Nenets*. Berlin: Mouton De Gruyter. / Næss, Åshild (2007) *Prototypical transitivity*. Amsterdam: John Benjamin. / Næss, Åshild (2009) Varieties of dative. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The oxford handbook of case*, 572-580. Oxford, New York: Oxford University Press. / Overall, Simon E. (2007) *A grammar of Aguaruna*. PhD thesis, La Trobe University. / Schackow, Diana (2015) *A grammar of Yakkha*. Berlin: Language Science Press. / Schrock, Terrill B. (2017) *The Ik language Dictionary and grammar sketch*. Berlin: Language Science Press. / 下地理則 (2016) 「格体系記述の中間報告」下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日(編)『尾前調査班 中間報告書 宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説』35-53. 東京: 国立国語研究所. / 下地理則・松岡葵・井上郁菜・宮岡大 (2018) 「与格項形容詞構文について～宮崎県椎葉村尾前方言を中心に～」第 43 回九州方言研究会口頭発表. かがしま県民交流センター, 2018 年 1 月 6 日. / 下地理則・松岡葵・宮岡大 (近刊) 「宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示」木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編)『日本語の格表現』東京: くろしお出版. / Widmer, Manuel (2014) *A descriptive grammar of Bunan*. PhD thesis, University of Bern.